

《金菱 清》氏

「夢と幽霊から見た“緩やかな”死の受け止め方～東日本大震災という問い～」

死んだら終わりですか

津波にさらわれた震災の遺族にとっては亡くなっているのはわかりながら、果たして私の愛する家族や友人は本当に逝ってしまったのかという問いをずっと抱え込んでいます。「遺体すら見つかっていないのに法要をしなければならない。今も戸惑い受け入れられない自分があります」などの言葉に出会うわけです。私がなぜ夢や幽霊に辿り着いたかといえば、震災後、そうならざるを得ないような現場があったからで、それについてこれからご紹介します。

仙台市の隣に名取市閑上という場所があり、津波の難から逃れるために多くの人がこの中学校を目指して走り、その途中で多くが犠牲になりました。その学校の机にこう書かれていました。「町の復興はとても大切です。でもたくさんの人たちの命が今もここにあることを忘れないでほしい。死んだら終わりですか。生き残った私たちにできることを考えます」と。この問いの答えは書かれていません。読んだ人それぞれが考えなければならない問いだと思います。学生に聞いたところ、死んだら終わりという回答は 8 割にとどまりました。つまり 2 割は死んでも終わりではないと考えていることになります。このことから今回の大震災において、死者とどう向き合ってきたかということに着目する必要があったわけです。

幽霊現象

石巻市のタクシードライバーが見た幽霊現象の事例を紹介します。

1 件目は、震災から 3 か月後、初夏にもかかわらずファーのついたコートを着た女性を乗せ、求めに応じ目的地に向かいながら、その目的地が更地であること、コートを着ていることなどについて尋ねるやり取りをしたところ、「私は死んだのですか」と震えた声で答えてきたという。驚いたドライバーが後ろを振り返るとそこにはもう誰も座っていなかったという事例です。2 件目は、3 年後の 6 月、ダッフルコートに身を包んだ青年を乗せ、不意に「彼女は元気だろうか」と問いかけられ、ドライバーが気づくと青年の姿はなくなっており、代わりに恐らく彼女へのプレゼントなのだろう、リボンがついた小さな箱が置かれていたという事例です。

いずれも実際にメーターの運賃が発生しており、具体的な会話とか接触などがあるところが大きな特徴で、リアリティーを感じます。

宗教学など既存の学問に当てはめると、幽霊は二度と出てほしくなく、たたりや不成仏なので直ちに供養しましょう、という話になりますが、この両ドライバーは幽霊の無念の気持ちをすくい取ってあげられるのではないかと肯定的、好意的に受け止めています。犠牲者、特に行方不明者にとっては、こちらの世界かこちらの世界かを選別することが出来ず、苦痛である多くの人が存在するということなのだと思います。

例えば、パソコンのデスクトップに貼ってあるファイルや写真は、とっさに必要かどうか判断できず一時的に捨てずに保管しているものがよくあります。この一時的にという感覚が幽霊現象の理解に必要なのだと思います。一時的に預かる領域をつくる工夫を人間は行って、彼岸か此岸の世界に区分するのではなく、曖昧なものを曖昧なままでいいんじゃないと伝えてくれているのではないかと思うわけです。

壮絶な現場の状況は、映像などで伝えられる部分からかなり落とされています。ご遺族が遺体を見つけるシーンの手記を紹介します。「（ブルーシートが開かれ母親の遺体と対面）お母さん、お母さん寒かったね、と声をかけながら拭いてあげた。お母さんどんなに恐ろしかったらうか、どんなに寒かったらうか…（中略）…母に毛布を掛けて温めてあげたかったがその毛布すら準備してこなかった。なんて気の利かない娘だと思ったかもしれない。それでも何とかしたくて小さなタオルで首を覆ってあげた」。

遺族の方々にとっては、絶対に忘れてはならないという一種の強迫観念のような思いと、それでも薄れてしまう自分の記憶や感情の狭間で、とても重苦しい葛藤を感じている方が多く、これだけ愛していたと記録に書くことにより一時的に保管でき、記録を開けばその思い出が蘇り、自分も楽になるという。カウンセリングと違い痛みを解消するのではなく、痛みを温存する方が大切なのだらうということが分かってきたわけです。

亡くなった方宛の手紙を書いてもらったこともあります。そこには伝えたくて仕方がない思いが書いてあるわけです。普段、私は人にインタビューをして何かを学ぶということをしていますが、その思いに行きつくことは無理だと感じました。インタビューは第三者に語るため死者という当事者はいません。しかし手紙は当事者である相手に対し全て感情移入でき、寄り添うということを超えたものとなっており、話す機会がなかったか、話すべきではないと閉じてしまった人達の声表れているものだと思います。

夢まで会いに来てくれた

そのような手紙の多くに登場する「夢」について紹介します。「（亡くなった奥さんと）指切りしながら『何もしてあげられないよ』『でも信頼している』『急がないから』『待っている』確かめるように話をした。『あの世から簡単に助けることはできない。こっちに来るのを待っているから、そっちの世界で修業をしておいで』と妻に言われているような気がしました。指切りをした手の感触は鮮明に覚えています。」

また別の方の夢は「クリスマス時に（1歳で）亡くなった息子とスタジオで写真撮影をした。出来上がった写真は背も伸び中学生のような背格好だった。前夜、寂しいと言っていたから会いに来てくれたのかもね。神様素敵なクリスマスプレゼントをありがとう。」

一般に夢はすぐに忘れてしまいますが、遺族の夢はこのように鮮明な明晰夢であることが多いわけです。そして何らかのメッセージを持っていたり、過去に留まらず、現在進行形で何らかの助けを乞うたり、自分と一緒に生きている現在進行形に変える力を持っています。遺族はどこか社会から認知されず孤立無援なところがあり、まさに夢によって助けられるというような孤立“夢”援というものが現場から見えてきたのかなと思っています。

能楽の世界と本日のテーマ

能楽師の安田登氏は言います。「初めに順行する我々の時間があり、それを逆行するような時間に乗っ取られていくことにより、過去・現在・未来を往来するタイムマシンのように永遠の時間を実感できるものが能楽である」と。これは近代的な時間の概念とは違うものであり、これが既に中世に完成していたことに驚かざるを得ません。

そんなことを考えながら、近代的時間管理下で時計に縛られた生活から少し距離を置いてみると、亡くなったから即座に供養とかあちらの世界に送るということを必ずしもせずに、そのまま一緒に生きてもいいのではないかと、自分が納得するときに送り出せばいいのではないかと、そのように思うわけです。それが本日のテーマの「『緩やかな』死の受け止め方」だと思います。